295-1970・1

定価一部100円
第295号　昭和45年1月10日発行（毎月10日発行）

昭和45年（1970年）
1月号（No. 295）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

本文
エベレスト登山隊員決定……1
エベレスト隊員紹介……1
エベレスト通信④……2
スペイン山岳団体……4
新・爺蘭土雑記④……6
キンボール博士の報告……6
会員通信
オレゴンの山……越田　和男…3
欧州アルプスの集い…平沢亀一郎…3
図書紹介
ふるさとの山……古沢　肇…7
図書室便り
新刊図書受入報告……7
定期刊行物受入報告……7
洋書受入報告……7
第二回図書交換即売会寄贈図書……8
加納氏のスクラップブック……8
会務報告
12月理事評議員会……8
12月支部長会議……8
11月常任評議員会……9
昭和44年度年次晩餐会……10
ことしのこの一本展……10
ルーム日誌……10
会員異動……10
その他
第13回紅葉会……9
遭難対策シンポジューム……9
海外登山技術研究会……10
あとがき……11

エベレスト登山隊員決定

会長　三田幸夫

第二次偵察隊の報告にもとずき、本会では、加藤本部長、松方隊長、大塚登攀隊長等が中心となって慎重に隊員の選考を行なっていたが、このたび別項の通り三十名の隊員選考を終わり十二月二十七日開催の臨時理事・評議員会で了承を得たのでご報告致します。

当初の計画では、松方隊長以下科学班を含め二十五名の予定であったが、第二次偵察隊の報告にもとずき南壁登攀要員として五名を追加、計三十名に増員し万全を期することにした。

〔隊員構成〕

○隊長　一名
○登攀隊長　一名
○登攀隊員二一名（女性一名を含む）
○科学班
　気象観測　二名
　地球物理　一名
　高所医学　四名　七名
他に毎日・NHKより報道班員八～十名が参加の予定

〔平均年令〕
隊長を含めると……三二・八歳
隊長を除くと……三一・四歳
登攀隊員のみ……二九・七歳

〔年令差〕
最高　七一歳　松方隊長
最低　二三歳　伊藤隊員

〔年令構成〕
二〇～二九歳……一二名
三〇～三五歳……一〇名
三六～三九歳……五名
四〇以上……三名

〔所属別〕……十七団体

〔海外登山の経験〕
○エベレスト偵察隊員……六名
○ヒマラヤ登山の経験者……一三名
○ヒマラヤ以外の海外登山経験者……八名
○海外登山初参加者……三名

エベレスト登山隊員紹介

隊長　松方三郎（71）

登攀隊長　大塚博美（45）会員番号三五一四番（明大OB）本会常務理事、第二次、第三次マナスル登山隊員、一九五九～六〇雪男探検隊参加

登攀隊員

①松田雄一（39）会員番号四一一一番（日大OB）本会常務理事　第二次、第三次マナスル隊員、ヒマルチュリ登山隊員。企画・総務担当

②藤田佳宏（37）会員番号四五二一番（明大OB）本会理事、マッキンリー、ゴジュンバカン隊員、第一次エベレスト偵察隊長。企画・総務担当

③平林克敏（35）会員番号五〇七二番（同志社大OB）関西支部委員、アピ、サイバル登頂。酸素・輸送担当

④松浦輝夫（35）会員番号五一〇七番（早大OB）ローツェ・シャール最高到達隊員。設営担当

⑤田村宏明（32）会員番号六一九九番（明大OB）ペンタンカルポ単独登頂者。装備担当。

⑥中島　寛（31）会員番号五五七〇番（一橋大OB）本会理事、ペルー・アデス、第二次エベレスト偵察隊員、渉外担当

⑦平野真市（31）会員番号五七五〇番（明大OB）学生部指導委員会委員、ゴジュンバカン隊員、装備担当

⑧土肥正毅（31）会員番号五五五五番（明大OB）遭難対策委員会委員、指導研究委員会委員、マッキンリー隊員。食糧担当

⑨小西政継（31）会員番号六八七五（山学同志会）マッターホルン北壁冬季登攀、第二次エベレスト偵察隊員、装備担当。

⑩渡部節子（30）会員番号六三七〇番（オカリナ山岳会）婦人懇談会・集会委員会委員イストロ・オ・ナール登頂隊長付、会計担当。

⑪加納巌（29）会員番号六七二七番（大阪府立大OB）スプチュー隊員、酸素担当

⑫錦織英夫（29）会員番号六一七〇番（学習院大OB）学生部ならびに指導研究委員会委員JAC学生部アラスカ登山隊長（フォーレーカー、ハンター峰）輸送・設営担当

⑬神崎忠男（29）会員番号六〇〇二番（日大OB）集会委員会委員、グリーンランド、フォーレル登頂、設営担当

⑭植村直己（28）会員番号五七二六番（明大OB）ゴジュンバカン登頂隊員、第一次、第二次エベレスト偵察隊員、目下越冬中。設営担当

⑮成田潔思（28）会員番号六七五七番（慶大OB）輸送・設営担当

⑯神山義明（27）会員番号六八一三番（京大OB）装備・輸送担当

⑰鹿野勝彦（27）会員番号六七六八番（東大OB）山日記編集委員キンヤンキッシュ隊員。食糧担当

⑱吉川　昭（27）会員番号六五六五番（第二次RCC）ドロミテ地方での登攀を行なう。装備担当。

⑲安藤千年（26）会員番号六七四五番（防衛大OB）パタゴニア遠征隊員、食糧担当。

⑳嵯峨野宏（24）会員番号六四二八番（日大OB）グリーランド横断隊員、装備担当。

㉑伊藤礼造（23）会員番号六八九〇番（山学同志会）一ノ倉、滝谷第一尾根等の冬期登攀。装備担当。

〔科学班〕

（I）気象観測担当
①長田正行（30）会員番号六七四四番（防衛大OB）ローガン遠征隊員。
②井上治郎（24）会員番号六八八七番（京大OB）パタゴニア遠征隊員、第二次エベレスト偵察隊に参加、目下越冬観測中。

（II）地球物理・通信担当
河野長（30）会員番号五八六三番（東大OB）パルトロカンリ隊員。

（III）高所医学・医療担当
①住吉仙也（43）会員番号四六七五番（大阪大OB）本会前理事、関西支部委員、ヒマルチュリ第一次、P29隊員第三次P29登山隊長、整形外科・医学博士
②中島道郎（39）会員番号四六四四番（京大OB）元関西支部委員、チョゴリザ登山隊員、呼吸器科、医学博士
③広谷光一郎（37）会員番号五〇三七番（大阪市立大OB）本会常務理事、ランタンリルン隊員、生理学・医学博士
④大森薫雄（32）会員番号五一三六番（慈恵医大OB）医療委員会委員。第二次エベレスト偵察隊員、整形外科・医学博士

エベレスト通信④

宮下秀樹

【第八信】

九月二十日　アイスフォール入り第一日目。朝七時半より小雪、終日続く。下部は西稜寄りに歩く。ラッセルは膝の下まで。本日ヤク一頭四百ルピーで買い、ナムチェの殺し屋が殆んど血も流さずに殺し、皮と肉を上手に処理してくれる。

九月二十一日　四時半起床。小雪が降り続いておりシェルパも悪天を見越して起きて来ないので一喝。七時まで待つが悪天のため停滞。ポストランナーと後発に合流させるためタワ・トンデュップを下山させる。

九月二十二日　晴後十一時頃より曇時々小雪。前日のハッパが利いて五時十分前に朝食。CI予定地一時間程手前までルートが付く。

九月二十三日　晴後曇、午後より小雪。九時半にCI予定地着。ただし直前が悪くルート工作に手間取りそう。

九月二十四日　ガス後晴時々曇、午後雪。

先行隊は八時半予定地に着き、そのまま上部のルート工作。後発もルートを補強しながら九時半CIに着き直ぐ整地にかかる。十時の交信でウェスタンクームの入口まであと二十分くらいとのこと、今回はアイスフォール中にCIを建設せず、CIIを直接設けることに決めた。下のデポ地よりシェルパがわれわれと別れて下り始めたので、丸太でも拾ってくると思っていたら、米、印製と思われるジェラルミンのスコップ。背負子、スノーバー、空ボンベなどブラ下げてBCに帰って来たのにビックリ。

中にアノラックを持っているシェルパがいたのでちょっと見ると、胸にJEKEとあり一瞬ハッとする。若しやと思ってシェルパを問いつめるとやはり人間の遺体らしきものがあるとのこと。遺品らしき物は一括保管し翌日見に行くこととした。

九月二十五日　終日小雪、停滞。サーダーのみ連れて現場に行く。やはり六三年の米国隊の隊員、ジョン・E・ブライテンバックが殆んど白骨状となりダブルの登山靴だけ妙に痛々しく氷河上に横わっていた。大森ドクターの検案所見によると、全身の骨という骨は全て折れ、殊に頭部の損傷はヒドかった。氷河の表面に現われて一年以上は経過していようとのこと。ここ数年訪れる人とて無く、またルートも大分外れているところから今まで人眼に触れなかったのであろう。遺体を直ちに火葬にすべきと思ったが、シェルパの強硬な反対にあい（天候が悪くなり登山が出来なくなるという理由）一時丁重にキャンバスに安置し、一同で合掌する。遺品としては、ピッケル、時計（死亡後四日間動いていた）、水筒、写真機、通信機など殆んど身につけていたと思われる全てを回収出来た。

折しもタンボチェのヘッドラマが雪の中をわれわれのBCに前触れもなく訪れた。

各国遠征隊が上って行くBCとは一体如何なるところと前々から行きたがっていて、われわれは第一回目の訪問となったわけである。早速一〇〇ルピーを寄進して、JEKEのおキヨメと、われわれの安全祈祷をお願いする。シェルパの気分も直りとてもグッドタイミングだった。それにしても全く奇蹟というか、偶然というか、六年半前の遺体発見にビックリした。

九月二十六日　引続き雪が降ったり止んだり。モンスーン明けの最後のアガキかとあせらず、停滞とする。

九月二十七日　晴。二日続きの降雪を警戒して、本日のCII建設を止めCIまでラッセルを兼ねて荷上げを行う。午前九時になるとアイスフォール全面に陽が当り、十時になると物凄く暑くなって露出した皮膚がチリチリする位焼け、而もアイゼンの団子に行動能力は半減する。さすがにこの日は表層雪崩が続発し、西稜側から大きいのが三発。アイスフォール全面が氷雪粉に覆われて、あまり良い気持ではない。先日付けたCI以上のルートがデブリに埋っているのでもっとスプツェよりに変更することにした。また直下のJEKEのやられた地点あたりの氷の動きは烈しく三日前よりかなりクレバスも大きくなっているので思い切って縄梯子で直登ルートに切り換える。

九月二十八日　晴、今日は一気にCII建設を狙うため四時半朝食、五時半出発。CIより上が初ルートのためラッセルにシゴかれたが、十時半CII着。BCより五時間弱の行程。中島、佐藤（之）が泊る。

九月二十九日　中島隊はウエスタンクームに入るが、インド隊の時と異りCII以上のクレバスは大き過ぎて、右に左にと迂回を余儀なくされる。ラッセルはヒザくらいまで。宮下以下はCI下のルートの補修に丸太を八本上げ橋をつくる。

午後、第一回目のポストランナーが上って来て、後発の井上隊の状況が解りホット一安心、まず順調の模様。

九月三十日　連日四時半朝食を続けるる。シェルパは十五キロの荷を背負ってCII往復五時間半と物凄い速さ。小西、植村が中島らと替ってCII入り。

十月一日　BCでもうマイナス摂氏十度、CIIでマイナス十三度に下り、これからの寒気の厳しさをひしひしと感じる。小西隊は米国隊のABC近くまでトレースする。

ただ南壁の取付き地点はもう少し上となりもう一つキャンプが必要だろうとの報告にちょっとガッカリ。

十月二日　CIIの小西隊も下山し全員休養。三日早朝ポストランナーを出すと共に再び行動を起す。

【第十一信】

十一月三日、文化の日、全員無事BCに帰着した。凄く荒れ果てたBCとCII間を隊員シェルパ共一回の撤収で終了したのは正に幸運であった。

最高到達点が八千mであったのはやや不満だが、連日マイナス三十五度を越える南壁ではこれが限度かと思う。何しろ全員凍傷にもかからず無事終わったことを喜んでいる。

十月十三日　ポストランナーの出発が一日遅れたBCでもう一日休み。

十月十四日　最後のCII入りするBCで上のABCと交信していると隊員の疲労が目立って来たのか、動きもニブクなって来ているので、毎日の佐藤記者を除いて報道班も全員上ることとする。CI直下で前夜ブロックの大崩壊あり、約百mに亘り陥没。途中にあった縄梯子、丸木橋、継ぎ合せの長いジュラ梯子（スキー隊の）の丸木橋まで全部氷塊の下。宮下、白井とローカル一名を残し一旦全員をBCに降ろして、休養中のCIIの中島、佐藤（之）の応援を得てCIIに上る。折角スキー隊に貰った二百mのフィックスを使い切ってしまう。またCII直下では二十日に造り直した新ルートの一部が崩壊し、全くどう仕様もないほどの荒れ方。

十月十五日　スキー隊は本日撤収。軍鑑岩の二人用天幕を四人用に張替え本格的な基地とする。植村とミンマで七千四百五十m位までフィックスを張る。

十月十六日　宮下以下でCIVまで荷上。矢張り直上ルートはキビシイ。CIIより中島以下が入り毎日佐藤を除いて全隊員ABCに集結。全員で今後のスケジュールを打ち合わせる。ヘバリも来ているし、七千五百m付近のキャンプサイトも見付からないので、ツェルトビバークの短期決戦論が多かったが断乎テントを張ることを主張。そのため日数の延長は構わぬ事とした。

十月十七日　午前中酸素の器具テスト。前回植村、共にマスクが不調で眼鏡がクモリ、二人共雪盲になったので余り酸素使用賛成派がいなかったが、何しろ八千m以上の行動には不可欠であるから来年のためにも積極使用を望む。

しかし今回の酸素器具に関しては全く欠点だらけで本当に参った。（略）

田辺、大森、井上はCIIに下り、中島、佐藤でCIVに入り、キャンプサイトの発見に努力して貰う。夜に入って雪が降りかなり寒い。ABCでマイナス二十八度を指す。

十月二十八日　中島隊の調子が余り良くなく七千五百mまでも達しそうもないので十二時に下山をすめる。替って小西、植村をCIVに入れる。明二十九日は必ずキャンプサイトを見付けると云う事でシェルパ達にABCより七千五百mまでの大ボッカを命令する。田辺、大森はBCに下り毎日佐藤と合流する。

十月二十九日　晴時々曇。この日は本遠征中最も重要な日だとサーダー以下八名のシェルパに十五キロ持たせ七時に出発する。宮下同行するもマイナス二十九度では相当に寒さがコタエ、ピッケルを持つ手がシビレてくる。さすがに軍鑑岩からのトラバースをして直登ルートは辛く、ルンゼの右岩稜の取付点（蝶岩七、二〇〇m）でシェパが一人ダウン、それから上が平均斜度四十五度の岩混りの氷壁、途中でもう一人ダウン。ガックリペースが落ち、二時頃から二時間にわたりCVにポチ

ポチ到着。CVのキャンプサイトはCⅣを早朝酸素を吸って出掛けた小西、植村がルンゼの略中央部七千五百mの地点に大きな岩が二つありその間の氷雪を削れば何とか二人用天幕が張れることを発見。約百キロの荷物でCVが完成した。CⅣへ中島、佐藤が入り、ABCに井上が上って来る。

十月三十日 曇十一時頃より小雪。寒気厳しい。CVの小西隊よりフィックスドロープの要求が強いのでCⅣの中島隊に途中デポしてあったロープ十三本をCVに荷上して貰う。小西隊は南壁に陽が当り始めた九時に出発。ルンゼの一番狭くなった七千八百mあたりまで登り切る。なにしろ日中の交信でもじっとしていると寒いので勘弁して呉れという。夜白井さんが不調となり大事をとって川崎航空の酸素二本吸わせたら翌朝はグッと容態は良くなった。このボンベも一本は七十もう一本は百十五気圧しか入っていなくてガッカリ。(通常は百七十気圧入り)

十月三十一日 朝少し風、後十時頃よりガス。CVの小西隊は九時、フィックス十三本全部を持って出発、八本を使い切る。午後三時半正面大岩壁の基部より右側のルンゼに入り、約八千mの高度に達しCV、CⅣを経てABCまで一気に下る。ライトを持って迎えに行き六時半着。よく頑張ってくれたと感謝する。この日中島、佐藤CVに入る。ミンマ以下三名再びABCよりCVへ荷上。夜七時の交信で酸素一本をミスで空にしたとのこと、翌日二本上げることを約束する。

十一月一日 晴、中島隊は本日の行動に全てを賭け勇躍出発。佐藤のマスクがフィットせず眼鏡の曇りが烈しく少し調子も下り坂だったのであまり距離が延びず二時半小西隊の最高到達点に達し、小憩後五〇mのワンピッチを延ばすのに二時間半を要した。最後は岩登りに終始したようだがさすがにこの辺りの岩登りはキツイと思う。結局再び八千mのラインを越しCVに戻ったのが六時四十分。もう真暗になってからである。翌日の行動は諦めざるを得ない。大森ドクターABCに来る。

十一月二日 曇。雪盲にやられた佐藤は一晩中雪で冷して貰い、何とか一人で歩いて下れる。中島は几張面にCVの天幕を片付け十一時過ぎCⅣ経由で午後二時、CⅣを撤収に上った植村隊と合流してABC着。早速ドクターに捉って心電図や血圧その他のテストを受ける。ABCの大半の荷物は南壁の岩場にボルトを打って宙吊りにしたためこれから下の撤収は一回で可能となる。小西、白井一日早くBCに下山。

十一月三日 快晴、BCから逆荷上のローカルポーターの応援を得て、ABC、CⅡ両方を一時に撤収出来た。

CⅡ出発前シェルパ達にアイスフォール通過の注意を与えた後、直下に眠るブードルジェに黙祈し全員重荷を背負って下山。CⅡ直下の荒れたルートの通過が一回で終わったことに感謝している。南壁の情況については帰国後委しく説明するが、感想を述べる。

① 傾斜はベルグシェルンドより軍鑑岩まで三十八度、その上蝶岩まで四十度、以降ルンゼに入ってCV経由岩壁基部まで四十五度。正面岩壁は全体として略々垂直に近く、部分的にオーバーハング。

② 今秋は蒼水の部分も多く、スクリューハーケンが良く利き、岩の部分はロックハーケンが有効であった。ルンゼの上部は短いスノーバーも活用したが、来春はロックの部分が相当に多くなるので数種の(逆層で横リスが多いので)ロックハーケンが必要。

③ 今回は南壁だけで延二、一九〇m使用したが、あと千mは必要である。

④ 落石がかなりある。多分春の方がより多いであろう。今回も人頭大や、平たいスレート状のが何回か身辺をカスメた。酸素器具とも関連するが、頭部保護を充分考えてほしい。雪崩の危険は降雪直後と、一部を除いては余り心配はない。

⑤ 最大の問題はキャンプサイトの無いことであろう。基地にした軍鑑岩の直下は労力をかければ危険の無いテント地としてまだ余裕があるが、七五〇〇m付近は、氷雪を削ると直ぐ岩が露出するのでまず大きなテントは建設不可能である。前に連絡したような特殊テントを考えてもらいたい。

今回僅か四泊だが山側は雪で埋まり一部破損したくらいである。また八千m付近では白いフェース上部に現在ならば氷雪の棚が見出せるが、春にはどの位の雪量になるか、しかし何とかセット出来そうである。

(酸素器具その他の装備の項省略)

なお越冬隊については、いったんカトマンズまで一緒に下山するが、井上をベリジェ(四三〇〇m)に植村をクムジュン(四〇〇〇m)に残してそれぞれの仕事をして貰う。(以上)

会員通信

オレゴンの山

越田和男

米国西海岸オレゴン州に二ヵ年滞在してまいりました。彼地にはOregon Cascadesとよばれる山脈が、有名なMt. Hood(11245 ft)を北端に南北に走っており、三千m級ではありますが、一応小型の氷河を備えた山々が楽しい登山の対象となっております。

大変山登りの盛んな地方で、私の在籍したオレゴン大学にはAlpine Club もあってよく岩登りのトレーニングに参加したりいたしました。エベレスト登頂者のL. Jerstadも同じ大学におり、彼のセミナーには町の人達もわんさと押しかけて来ておりました。大学町のEugeneにはObsidiansという山岳会もありなかなか活溌です。またポートランドに本部を持つMazamasという山岳会は米国でも有数の会で、その年次晩餐会に出席いたしましたが、なんと八百名もがホテルの会場を埋め、ゲストに遠路シャモニーからレビュファーがやって来るなど、地方の一山岳会とは思えぬ盛況さにおどろかされました。

日本からオレゴンへわざわざ山登りに行かれる方はないと思いますが、ポートランドあたりに出張される方は多いと思います。オレゴンの山々は週末の登山には最適でしょう。ポートランドから望めるMt. Hood, Mt. St. Helens(9671 ft, ワシントン州内)共に夏の一般ルートからの登頂でもピッケル、アイゼン、ザイルが必要でした。一応何らかの基礎訓練を受けた人達でないと登っていないようです。

Mt. Jefferson(10405 ft), Mt. Washington(7802 ft)は更に上級の山とされています。Three Sisters(10094, 10053, 10354 ft)は大変美しい山です。米国で山登りをして感じたことは、スケールの大きな大自然もさることながら、山に紙屑や空罐が全く見あたらなかったことです。

オレゴン方面へ御旅行される方がありましたら、地図その他資料を持ち帰ってありますのでぜひ御一報下さい。

欧州アルプスの集い

平沢亀一郎

私共は永い間山に登っておりますが欧州アルプスを観ずに山を語る資格はないといわれてます。私も是非行って見たいものと願っていました。偶々今春わが日本山岳会の総会に出席しましたところ神谷さんや松本さんから、来る六月に、われわれはヨーロッパ・アルプスに行くから君も参加しろと勧誘されましたので、スイスの山に詳しい槇有恒君に相談したところ、スイスの六月は年中で一番気候のよい時で大体晴天が続き唐松の新緑が美しくお花畑が真盛りでしかも風見武秀氏の案内ならこの上ないよい機会だから是非行けとすすめられ決行した。

世話役は日新航空で久村進という若い職員が附き添ってくれ、スカンヂナビア航空機で六月四日羽田を立ち、マニラ、バンコック、カラチ、テヘラン、ローマを経てチューリッヒに着きスイス、フランス、オーストリア、イタリアに跨るいわゆる各名山を殆んど廻り快適な旅行を続けてデンマークのコペンハーゲンに出て、ノルウエーを縦断しグリーンランドを低く飛び、白夜の空はよく晴れて氷と雪に閉ざされた大陸を手に取る如く眺め、アラスカのアンカレッジに寄って六月二十五日の夜二十二日間の旅を終えて羽田に帰った。

一行は会員十二名に写真家三名、婦人二名の十八名で、全員写真機を三、四台携行して撮影に熱心なのには敬服した。山に雲がかかれば何時間でも晴れるのを待ってるので、お陰で私は山を満喫することが出来た。宮城支部長の伊藤篤郎君は十六ミリ撮影に取り組んで編集し素晴しい出来ばえで、仙台では各種の催しに毎日のように引張り出されて山岳解明に貢献している。一同はその傑作を持ち寄り観覧することになり十月十八日宮城蔵王の山麓蔵鳳荘に十五名が集り各自四ツ切りに拡大したカラーの美事な幾百枚かの作品を披露した。私はこれ等の写真を見てその人の努力と個性がよく顕れてるのに一大発見をした。そして最後に伊達君の映画を観賞した。

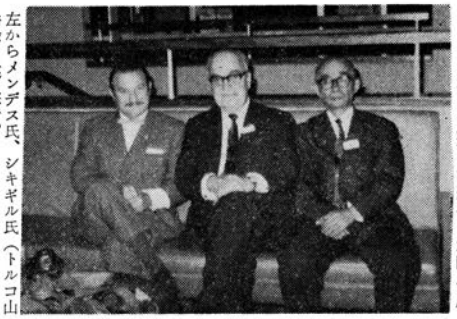
スペインの山岳団体と
——FEM年報1968の紹介——

吉沢一郎

スペイン山岳連盟の会長、フェリス・メンデス（Don Felix Mendez Torres）氏とは、一九六一年のペルーのリマで会って以来私とつき合いがあったが、一九六八年一〇月にはUIAAの会で、ロンドンとノース・ウェールズで行動を共にし、又マドリードで再び会いろいろ話しあったなかである。

前に会報と山日記に「スペインの高峰一覧表」というのを出したことがあるが、あれも私が一応作って彼の処へ送り、修正してもらったものである。

今度彼から私あてに送ってきた、スペイン山岳連盟の年報（Anuario, 1968）は、私にとって大変参考になる、内容豊富な年報であった。FEM即ち、Federacion Espanola de Montanismo の組織や案内者組合、登山小屋、事故統計などが委しく盛りこまれてあったのである。



左からメンデス氏、シキギル氏（トルコ山岳会々長）筆者。ロンドンのボニントン・ホテルにて。

従来、スペインの山岳団体については、日本に余り紹介されたことがないので、これを機会に一応まず「山」に発表して、皆さんの御理解を得ておくことにする。

但しその会の創立年月日や会員団体の年会費、運営の方法などについては何も書いてない。これらについてはいずれ又照会して回答をもらうことにしよう。この会の副会長、ホセ・ゴンサレス・フォジオット氏（Jose Gonzalez Follioi）にも私は二度会っている。

FEMにも、フランスのGHMやオーストリアのOAK、英国のACGと同じように、Grupo de Alta Montana Espanol（GAME、スペイン高峰山岳団体、一九四九年創立）というのがある。国際的にも会員の入会を認めているとみえて、その中には私の知っているだけでも、有名な活動的な登山家が何人か入っている。一一八人のうち一〇人が死んでいるから、現在人員一〇八人ということになる。

又、特別な組織として、国内高山学校（Escuela Nacional de Alta Montana）、洞窟学委員会（Comite Nacional de Espeleologia）、山案内組合（Cuerpo de Guias de Montana）等がある。

最後のものはピリネオ（ピレニーズ）の東部、中部、西部、エウロパ峰群、グワルダルラマ、グレドス、シェラ・ネバタ山群等にあり、又、エウロパ峰のレオン側には、ポーター組合もある。

◇

次に地方にあるFEMの構成団体については別表を見られたい。（本部所在地は私が加えた）

◇

各地方、州の連盟の地域別とその団体数（Sociedades Afiliadas）は次の通りである。——連盟名はABC順、次の数字は所属団体数、次の数字は三〇〇人以上の会員をもつ団体数——

Andaluza :
Granada (12—2), Malaga (1—0)
Cordoba (1—0), Jaen (1—0),
Sevilla (1—0).

Aragonesa :
Huesca (2—2), Teruel (2—1),
Zaragoza (6—1).

Asturiana :
Oviedo (24—4).

Canaria :
Las Palmas (3—1).

Cantabra :
Santander (4—3).

Castellana :
Burgos(2—0), CiudadReal (1—0)
Logrono (1—0), Madrid (23—10)
マドリードの中に **Club Alpino Espanol** あり。一九〇八年創立。現在一七八一名。
Palencia(3—1), Salamanca(1—0)
Segovia (1—0), Soria (2—1),
Valladolid(1—0), Zamora (1—0)
Badajoz (1—0).

Catalana :
Barcelona(78—22), Gerona(5—0)
Lerida (5—1), Tarragona(10—0)

Gallega :
Lugo (1—1), Orense (1—1),
Pontevedra (2—2).

Leonesa :
Leon (4—0).

Tinerfena :
——(4—0).

Valenciana :
Alicante (7—3), Castellon(1—0)
Murcia (1—0), Valencia (7—1).

Vasco-Navarra :
Alava (6—2), Guipuzcoa(49—13)
Navarra (23—2), Vizcaya(33—5)

◇

避難小屋及び山小屋（Refugios y Albergues en los Sistemas Montanosos Espanoles）については、余り悉しく紹介しても煩わしいだけなので、大ずかに書いておく。

Macizo Galaico …… 8
Picos de Europa ……11
Cordillera Cantabrica……10
Montes Vascos ……17
Pirineos (Fr. 国を含む) ……78
Cord. Costera Catalana…… 7
Sistema Iberico……13
Sistema Central……18
Sierra Morena…… 2
Sistema Penibetico ……12

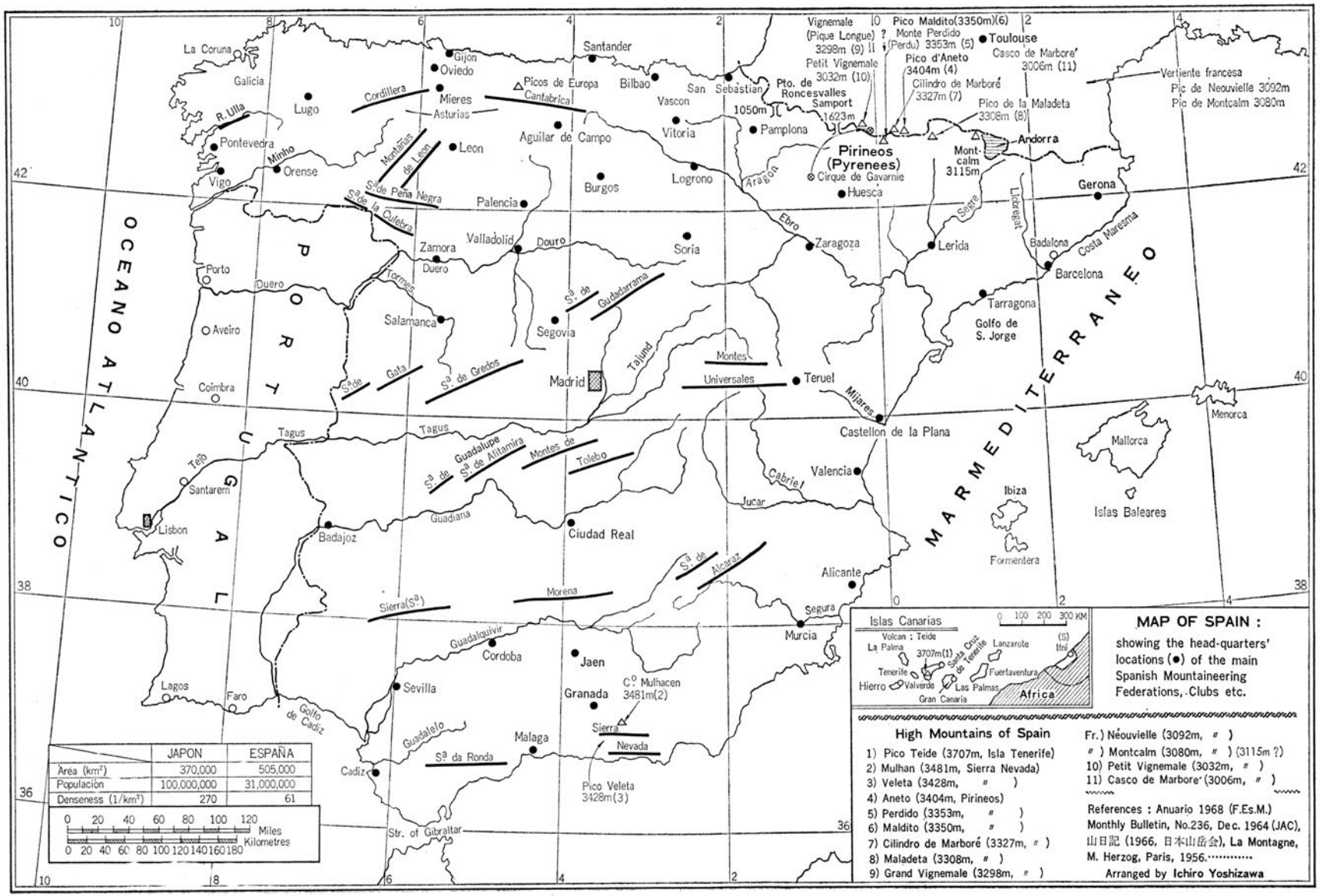
これは南方の Sierra Nevada 地方で、メンデス小屋あり。

Canario…… 7

遭難統計（Accidentes de Montana Ocurridosen 1968）によると、死亡、重傷計一五名となる。岩場が多い。

スペイン山岳連盟構成一覧
(Resumen Estadistico)

地域別	連盟 名称	連盟 本部所在地	所属団体数	会員数 正会員	会員数 準会員
地方 (Regionales)	Andaluza	Granada	16	1,439	580
	Aragonesa	Zaragoza	11	3,646	1,719
	Asturiana	Oviedo	24	4,328	1,879
	Castellana	Madrid	37	10,130	3,242
	Catalana	Barcelona	98	30,646	14,518
	Gallega	Vigo	4	2,095	500
	Valenciana	Valenciana	16	3,720	1,513
	Vasco-Navarra	Bilbao	112	22,215	7,657
州 (Provinciales)	Canara	Las Palmas	3	485	215
	Cantabra	Santander	4	2,086	160
	Leonesa	Leon	4	148	100
	Tinerfena	Santa Cruz de Tenerife	4	525	413
	計		333	81,373	32,495



	JAPON	ESPAÑA
Area (km²)	370,000	505,000
Population	100,000,000	31,000,000
Denseness (1/km²)	270	61

295-1970-1

新・爺蘭土雑記 ④

藤島敏男

氷河を下る　あくる日は若人ふたりとガイド、足のそろった三人でマウント・グリーン（九三〇五フィート）へ早暁から登って、午後からタスマン氷河を下ろうときめたのだが、生憎夜半から雪が降り始め、結局登山は中止、天候の回復を待って十一時頃小屋をあとにした。

稜線は雲につつまれているが、薄日がさして雪は軟かく、照り返しはあつく、無数のクレバスを跨いだり、飛び越えたり、足の短い私には中々の労働、それが四時間近くも続いて、いよいよマルテ・ブラン小屋の下まで辿りついた時、クタクタだった。それからさらに二百mほど、ガラガラの岩を登って小屋に着くと、もう物を言うのもいやになった。

小屋には十五・六人、勢いのいいのが先着していた。土曜日だったのだ。その中の六・七人が、私達と入れちがいに、上の小屋へと出かけていった。ホッホシテッテル・ドームとアイルマイヤーに登るのだときいて、私は心の中で〝まあよかった〟と思った。

実は私達の登った、このふたつの山が、余りに容易なものだったので、土地っ子などはテンデ目もくれない山ではないかと、ひそかに危ぶんでいたのだが、これで安心したというわけだ。

小屋に残った連中のリーダー、クロフォード君はテル女史前回来島の際、どこか一緒に歩いたので、なつかしがってわれわれの一行に、女史の顔のみえないのを残念がっていた。リーダー以外はずっと年若い連中だったが、食事の仕度でも、跡仕末でも若者の先頭にたって、手をくだしていたのには感心した。この調子ならばリーダーが隊員を、棒切でシゴクなどということはあり得ないだろう。きいてはみなかったが、育った環境や教養の程度が、どこかの国の下士官根性リーダーとは、ちがうのであろう。

翌日、N・Z連中は真夜中に、われわれ仲間の若者とガイドは三時頃に、それぞれ出かけていった。深田君と私とは朝寝坊をして、朝めしをすますと小屋のそとでこころよい温かさの朝陽を浴びて、素晴しい眺めをたのしんだ。タスマン氷河はヒマラヤ極地以外では、いちばん長大な氷河といわれる。スイス・アルプスではアレッチ氷河が、最大だが、それよりは遥かに大きい。小屋からは丁度マウント・クックのあたりから、氷河の源までが一目に見渡される。岩よりも雪と氷におおわれた部分が多いから、折から朝の光をうけて、まぶしくて目がいたいような景観である。みんな出払って、あたりに人影もなければ、物音もしない。朝露の光る草原に腰をおろして、空も山も、そして空気も、すべてが清浄の二字で表現される中に、とけ込んでいたひとときを、私は永く忘れないであろう。

早暁出かけた三人は、氷河から岩尾根をクランポンをつけたまま、若さにまかせよじ登って、主稜の一角に達したと満足気であった。老童ふたりは、それは面白かったろうと、相槌をうっただけだ。

七時すぎ小屋をあとにした。しばらくして山の端を廻ると、もうバスの終点ボール・ハットはあのあたりと、指顧されたのだが、氷河の表面はだんだん凹凸がひどくなり、やがて堆積の下に氷がかくれると、益々歩き難く、バスの待っている台地まで、六時間近くもかかった。氷河見物の観光客がバス一台分、発車を待ってたむろしていたが、そのなかに旅行社の介添人のついた日本人が、四五人まじっていたのは意外でもあったし、私はすくなからずガッカリした。

日本人に会う　近年日本人の海外渡航熱は大変なもので、欧州などは大都会から名所旧跡はもちろん、アルプスの麓の村でも、日本人におめにかからぬところはめったにないときいている。私はもう七十何年、日本人は飽き飽きするほどみているし、東京村ではどこえいっても人々で、うんざりしている。折角お国を離れて遠出するからには、沢庵人種（この語、辻村伊助著「スウィス日記」昭和五年梓書房刊、二四六ページ一行目にあり。インテルラーケンのカフェーで休んでいると〈室の中はざっと人類館という体裁だ、往来には、亜米利加人が六分通り、英吉利、露西亜がこれに次いで、沢庵人種はてんで見あたらない〉とある）それも日常私などお近付になる機会のない人達に、出先きで会うのは、出来るだけ避けたいとおもっていた。

N・Zゆきを思い立ったとき、彼地ならば沢庵人種列をなしているようなことは、先ずあるまいと考えた。また実際に、N・Zへきてからこの日まで二週間余のあいだ、日本人といえばフオックス氷河のレストランで戦争花嫁らしい婦人ひとり、クインスタウンの街角で見かけた、両手にカメラの紳士ひとり、これだけだったから私の思惑は外れなかったと、喜んでいた。ところがこんどの旅で、頂点ともいうべきタスマン氷河の山から、おりてきた途端に見知らぬ人から日本の方ですかとやられたのだから、私はガッカリした。用もないのに見知らぬ人に、話しかけるとは一体どういうことなのだろう。日本の方であろうとなかろうと、余計なお世話だ、苦りきって私はロクに返事もしなかったが、別に失礼にあたるわけでもあるまい。

ホテルまで三十分のバスに同車したきりだが、あとできけば、花を折ったり、紙屑を散らしたりして、国威を発揚した一行の片割れだった。しかしこれが最後で、私はN・Zを離れるまでひりとも日本人を見かけずに済んだから、我慢すべきであろう。

ガイドのこと　私達の伴ったガイドは、スイス・ベルンの近郊ボーリンゲンから来た、ロレンツ・ペリンチオリといって、27才の若者だった。やさしい山しか登らなかったから、腕前のほどはわからないが、登行中でも小屋でも、まめに動き働らく、忠実な点は買ってよいとおもった。それに料理が中中上手だった。70年の万国博に日本へ来たいらしく、コックの給料などきいていたから、案外経験があるのかもしれない。日当は一日12弗五〇、日本貨で五千円になる。小屋代は一泊一弗25、ガイドは一弗の割合だったことも、ついでに書添えておこう。テント持参、ガイドレスの人ばかりが、N・Zアルプスへ出かけるとは、限るまい。

（つづく）

キンボール博士の報告

昨夏、来日したシェラ・クラブの旅行について、総リーダーのキンボール博士から次のような報告が、本会宛に寄せられました。最終項に述べられているように、JAC会員が訪米の折は、シェラ・クラブへ是非、接触して欲しい旨手紙にも述べられておりました。今度はJACの皆さんを案内しましょうということです。（関口）

The Sierra Club Trips to Japan, 1969

H. Stewart Kimball
Chairman, Outing Committee
Sierra Club

I wish my means of this report to thank the members of the Japanese Alpine Club who helped plan and then assisted the successful execution of the Sierra Club's trips to Japan during the summer and fall of 1969. The trips were enjoyed by 180 members of the Sierra Club and were only possible because of the help obtained from the JAC. In addition many JAC members acted as guides in the Nikko and Japanese Alps areas.

The trips were planned for persons of ordinary physical ability and the groups were divided into a more strenuous group who went to the Hotaka-Yari area while the less strenuous visited the Nikko region. There were five trips with 32 to 39 persons each. In the months of July and August there were two trips for persons related to U. S.school vacations (teachers and students) while in September and October there were three groups who were able to take vacations at any time. Some trips were of four weeks duration; some of six.

The itinerary of all groups was essentially the same. After flying from the U. S. to Tokyo the members left for either Kamikochi or Nikko. After Kamikochi the firsr day's hike was to Karasawa, and the following day to Hotaka Hut. Several Hotaka summits were climbed from here. From Hotaka, weather and physical ability permitting, the members went along the crest to Yari. From Yari the hikers went down the

valley to Shiradashi-zawa where they met members who had stayed at Hotaka and who came directly down the sawa. By bus they left from there to Takayama where they met the members who had been in Nikko and come by train to Takayama.

Everyone enjoyed Takayama and wanted to stay there more than the one day allotted. The group then went to Toyama where they were welcomed most warmly by the Toyama chapter of JAC. That night they arrived at Berghaus near Murodo. The next two to three days were spent in this area where members climbed Tsurugi, Betsan, Tateyama, and Oku-Dainichi.

From the Tateyama area the trip went to Kyoto, some groups staying for a day at Kanazawa. After taking in the temples, shrines, gardens, restaurants and shops of Kyoto and Nara the trip progressed across the Inland Sea to the Mt. Aso National Park. Some groups stayed at Uchinomaki. All groups had a chance to climb Mt. Aso. From there the trip led to Nagasaki and back to Tokyo by air and then to Hokkaido.

In Hokkaido many national parks were visited, among them the Shikotsu Toya National Park. While staying at Lake Shikotsu, members climbed Eniwa and Tarumae. Another fine trip was a two-day hike across Daisetsusan National Park from Kogen Onsen to Tenninkyo staying overnight at Kurodake Hut. Lake Shikaribetsu and Lake Akan were visited and Me-Akan and O-Akan were climbed. Finally some of the groups were able to sail by fishing boat around Cape Shiretoko starting from Utoro and landing at Rausu.

All the trips, whether four or six weeks, offered the Americans an unusual opportunity to experience Japan in a more native fashion than most Americans do. We especially enjoyed staying at the Japanese inns and mountain huts, eating Japanese food, sleeping on the tatami, and best of all enjoying the ofuro. But what made the greatest impression on us Americans is the Japanese people themselves, their warm friendliness and courtesy. We made many friends we hope to keep and we hope we can show our mountains to members of the JAC when they come to America. Be sure to get in touch with us when you do.

ソ連登山界の近況

田村俊介

十二月十二日付、ギッペンレイター氏より招待状をもらい、グルジヤ共和国のみならず、ソ連の山岳界の現役の第一人者であった「ミハイル・ヘルギアニ追悼の夕べ」がモスクワ体育大学で行なわれたので出席してきました。

こちらでソ連アルピニズム年鑑全部（一九六四年まで全10冊）入手しましたので、ソ連のアルピニズムの歴史は殆んどのことはわかるようになりました。（十二月十五日付、モスクワにて松田死）

図書紹介

ふるさとの山
——上信越国境を歩む——

中村　謙著

中村さんの著書で戦前に出版されたものに「上信境の山々」（昭和十三年、朋文堂刊）というのがあって、沢山珍らしい山や谷が紹介されていたことを思い出す。中村さんの本には、長い間われわれはずいぶんお世話になってきたものである。

中村さんは越後の生まれである。朝日に輝く妙高山を仰いでは子供心にも胸躍らせた思い出をもつ。「少年時代に東京に移り住んでから、次第に山旅に傾倒するようになり、昭和六年、岩菅、苗場、三国街道、藤原、武尊、丸沼、菅沼、白根という十一日間の旅が上信越国境の山に深い縁（えにし）をもつきっかけとなった」という。これは本書の序文からの引用であるが、さらに中村さんは序の中で「その後、太平洋戦争による中断などがあり、戦後も交通難、食糧難のため思うままにならぬうち物知りの古老も物故し、山のゆきかたも大きくかわって、私の上信越研究は未完に終ってしまった」。と書いている。さらに「せめて自分の歩いたところだけでも文書に残しておきたいと思い筆をとった」と本書執筆の動機を述べているが、そのとおり本書は単なる案内書ではなく、中村さんの過去の山旅の総決算としての意味をもっている。

本書の内容は、「上越の山」尾瀬から三国峠以西の山まで、「信越の山」野反湖から火打山まで、ほかに「佐渡の山」と「伝説」六篇とから成る。正確に数えたわけではないが、紹介された山の数を目次から拾い上げてみると「山」の数はおよそ六十一、「峠」の類は十八、「原、沼」の類は十三あった。沢に至っては無数といってよいだろう。しかもひとつひとつの山について著者はいくつかの登山コースを紹介しているのだから、その裏付けとなっている山行はおびただしいにちがいない。それでも昭和四十二年に古稀の祝いを迎えて、山行一千回を記念したほどの中村さんにしてみれば、この本に示された山行くらいはほんの片鱗にすぎないのではあるまいか。

中村さんの本は平明である。記述も懇切である。強い個性に満ちたはげしい山の記録を好のむ読者にはもの足りないかも知れないが、中村さんの息の長い情熱はすばらしいと思う。たとえば「平ケ岳をめぐる谷の研究」を読んでみるとよい。ぎらぎらした闘志を表面に出さないかわりに、生涯絶やさぬ努力をつづける中村さんの態度がうかがえるだろう。

本書の記述には、序文にも断ってあるように、書き下しのほかに「山岳」はじめ既刊の各誌からの再録があるので、ところどころ行文の不統一が見られるのが惜しい。しかしそのおかげで紙上で思いがけなくとうのむかし故人となった貝瀬保などというなつかしい越後の山人に会うことができて、古いフィルムの一コマを見せられるような楽しさもあった。なおできるなら「索引」があれば、と思った。（古沢肇）

菊版、四二一ページ、写真、図版多数、正誤表付、昭和四十四年九月十五日、富士波出版社刊、定価八百円

図書室便り

新刊図書受入報告（昭和44・11）

芙蓉書房寄贈

(1)小方全弘著『ブータン素描—美しきヒマラヤの王国—』昭・44・10

木耳社寄贈

(1)石田岭松著『満州の風景』昭・44・7

風見武秀氏寄贈

(1)風見武秀著『ヨーロッパ・アルプス』（山溪カラーガイド 28）昭・44・11

山と溪谷社刊

日本国際地図学会より購入

(1)日本国際地図学会編『明治以降・本邦地図目録』昭・44

井上書店より購入

(1)牧野富太郎　三好学共著『日本高山植物図譜』第一巻、第二巻　明治39—41　成美堂刊

定期刊行物受入報告

【部報・会報類】

(1)『兵庫山岳』No. 30　44—11

(2)『国立公園』No. 240　44—11

(3)『山嶺』No. 475　44—11

(4)『登歩溪流会会報』No. 1/2, 3/4/5, 6/7/8.　44—11

【雑誌】

(1)『アルプ』No. 141　1969—11

(2)『地図』Vol. 7, No. 3　44—9

(3)『岳人』No. 270　1969—12

(4)『HIKER』No. 170　1969—12

(5)『山と溪谷』No. 375　1969—12

【その他】

(1)東京外国語大学山岳会・日本モンゴル合同学術登山隊『モンゴル・ハルヒラー山群1968年』昭44・10

(2)京都熊笹会・日印ネパール調査隊『ネパール紀行報告　1966～68』

(3)東京大学ヒマラヤの会『高山生理をめぐって』（ヒマラヤの会資料1）'64—10

(4)東京大学ヒマラヤの会『カルコルムの気象』（ヒマラヤの会資料2）'65—5

(5)アルムクラブ『ヒンドウクシュ第一次踏査隊行動記録　'46・7～8』

洋書受入報告

Acddemia 寄贈

(1)Arnost Cernik and Joset Sekyrd "Zemepis velehor", Praha, 1969.
山田圭一氏寄贈
(1)Matao Sanuki and Keiich Yamada, "The Alps", Tokyo, Kodan Sha, 1969.

Journals Arrived in November 1969

1. "Die Alpen", Jahrgang 45, 10, October 1969.
2. "Alpinismus" Jahrgang 7, 10, October 1969.
3. "Appalachia Bulletin" Vol. 35, No.10.October 1969.
4. "Der Bergsteiger", Jahrgang 35, Heft 10. Oktober 1969.
5. "Deutscher Alpenverein", Jahrgang 21, Heft 5. September 1969.
6. "La Montana" No. 12. Julio 1969.
7. "Rivista Mensile" Anno 90, No. 7—8. Luglio-Agosto 1969.

十月二十五日に催しました第二回図書交換即売会は、皆様のご協力をいただき盛会に終ることができました。それに際しまして、多数の方々から図書を寄贈いただきましたので、ご報告いたします。

第二回図書交換即売会寄贈図書

(カッコ内は寄贈者)

山の気象と遭難・気象庁予報課
光みなぎるところ・ソニエ・河合訳 (山崎安治氏)
カンチェンジュンガ・エバンス (斉藤　桂氏)
ヒマラヤ踏査隊派遣・立大山岳部 (藤島敏男氏)
毎日グラフ・マナスル登頂号 (後藤　伝氏)
高山深谷第八輯・JAC (田辺主計氏)
(戸沢英一氏)
兵庫県縦断報告・武庫川女子大
ヒマラヤの奥深く・大阪府大
ヒマラヤの山波こえて・都立大府立大
リフアレンス・マップ・インド
リフアレンス・マップ・スイス (以上田辺主計氏)
山と渓谷十三冊 (中島伊平氏)
初登攀行・松本竜雄 (深田久弥氏)
単独行、風雪のビバーク　加藤・松涛
新雪なだれ、神々の岩壁・新田次郎
チンネの裁き
岩壁の掟
旅情・山・主婦と生活社
西域八年の潜行上下、西川一三
槍ケ岳開祖播隆・穂刈三寿雄
山頂への道・山口耀久 (以上深田久弥氏)
新生印度連邦とパキスタン・田辺飯田
フィリッピン・中屋健弐
北海道の植物・館脇操
アムンゼン・山本一清
登山技術と用具・西岡一雄
砂漠の蒙彊路・ラテーモア
エベレストを目指して・ハント
北氷洋漂流記・米川正夫
アルプスと高原・日本交通交社
私の見たフランスのスキー・片桐匡
秘められた旅路・岡田喜秋
歴史の山旅・安川茂雄
可愛い山・石川欣一
インドで暮らす・石田保昭
エベレストの頂上へ・近藤等
西蔵探検記・ヘディン
天然記念物・鳥類編・内田清之助
正しいスキー術・沢本三郎
北海道・館脇操
スイスの山・山田圭一
ザイルの強さと正しい使い方・梶原
今日のインド・インド大使館
軽井沢と浅間山・岡村雋
山・串田保一
現代登山全集谷川岳・創元社
コンロン紀行・スミグノフ
世界山岳全集二、三、五、七、八、九、十、十二巻・朋文堂
岩登り・伊藤洋平
現代紀行文学全集・修道社
世界紀行文学全集・修道社
リュックサック第十号・早大山岳部
山岳二十、二十一、二十二、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六号 (以上三田幸夫氏)
登山全書四巻岩との闘い・河出書房 (西村久平氏)

製本の報告

(1)岳人　No. 45～50
No. 57～62
No. 111～116
No. 161～164
No. 244～246
No. 250～253
No. 258～260
No. 261～263
(2)山と渓谷　No. 277～279
No. 286～288
No. 308～311
No. 321～324
No. 334～337
No. 352～354
No. 355～357
No. 358～360
No. 361～363
No. 364～366
No. 367～369
(3)山岳(磯野文庫)第一年、第二年、第三年、第五年、第九年、第十年、第十五年、第二十五年、第二十七年。
(4)"SKI" '69, 1～2, '69, 3～4.
(5)"The Geographical Journal" 1927～1941, Vol. LXX～XCVIII 1951～1968, Vol. CXVII～CXXXIV
(6)"Die Alpen" 1934～1940, Vol. X～XXI
(磯野文庫) 1932～1948, Vol. VIII～XXIV

P・S・NO 6

一本展も無事終りました。今年は例年に比べて本が多かったせいもありますが、つくづく本というものは重いものです。間借りした二階が底がぬけて家主に追い出されたという話もあるぐらいですから。個人の蔵書の中でも、生きてる本と死んでる本があると思います。やはり死んでいる本は蘇生できる場所へ移してやるのがほんとだと思いますけど、いかがなものでしょうか。(東)

加納氏のスクラップブック

今回、深田さんの要望で加納一郎氏のスクラップ・ブックがJACの図書室に収められることになった。二十数冊にわたるこのスクラップは、朝日新聞を中心とした昭和期からの精密な山と雪の一側面を描いたドキュメンタリーで、山を中心に海外登山、探検など、さらに世相のビッグ・ニュースなど、多岐にわたっている。

ことに戦後の南極越冬隊関係の記事など、仔細にスクラップされており、文献資料としての意義を十二分に備えている。(安川)

会務報告

十二月理事評議員会

(4日6時半・ルーム)

▽出席者　吉沢、深田副会長、山崎、大塚、飯野、松田、小倉、野上、中島長尾、川上各理事、金坂、藤井、中田中野、石原、織内、沼倉各評議員、宮下エベレスト偵察隊長

▽議事

・エベレスト偵察隊帰国あいさつと報告 (宮下)
・年次晩さん会の件 (飯野)
二四七名の出席申し込みあり、取り消しなどで二三〇名くらい出席と見込んでいる。総合司会を村山雅美氏に依頼する。
・一本展の件 (野上)
エベレストこの一本展は吉沢氏の資料を中心に神原、深田、松方氏らに出品を願う。
・支部長会議の件 (深田)
十二月五日ルームで開く。支部報告や本部への要望を聞きたい。
・運営資金借り入れの件 (飯野)
短期で五百万円を協和銀行から借り入れる。松方、三田氏に保証人になってもらった。
・会員に対するエベレスト登山募金促進の件 (飯野)
・常任評議員会の件 (沼倉)
十一月二十四日国際文化会館で開き本年度名誉会員は見送ることにした。
・エベレスト登山記録映画の件 (中田)

▽報告

・万博用カラー・コルトン作成の件 (大塚)
・在日外人登山家交歓会は明春に延期する (松田)
・エベレスト・カレンダーを外国山岳会へ送付の件 (松田)
・テンジン来日招待の件 (松田)

十二月支部長会議

(5日2時・ルーム)

▽出席者　吉沢、深田副会長、山崎、飯野、大塚、辰沼、浜野各理事
中田、中野、小林、山本、熊沢、藤島、後藤、伊達各支部長

各支部の現状、本部への要望などについて話しあい、春と冬の支部長会議

のほか、秋にはいま一回会議を持つことを申しあわせた。これは各支部で持ちまわりとする。

十一月常任評議員会

（25日午前9時・国際文化会館）

▽出席者　渡辺、織内、村山、藤井、沼倉、中屋、中田、石原各常任評議員三田会長、吉沢副会長、飯野理事（委任望月、島田、折井）

▽議事

・名誉会員推薦の件

今回は見送りと決定

・エベレスト募金促進の件

・神河内山荘建設運営委員会復活の件

今後積極的に活動を再開することを申し合わせた。

第十三回紅葉会

山々に紅葉の季節が訪ずれる頃になると、静岡の紅葉会のくるのが待ちどうしくなってくる。十一月八日、本年で第十三回を迎えた紅葉会がやってきた。

地元静岡では、山本支部長を中心に、今年も、趣向をこらして、私達在京会員を心から出迎えてくれた。朝十一時三十分、静岡県庁前に集合した私達参加者は、大井川鉄道の貸切バスで、一路井川ダムへと向かった。

途中、安部川では、颱風のため大破損して通行止のため、川床に臨時に作られたでこぼこ道にゆられたり、上落合の休憩時には、この土地名産のコンニャクのおでんに舌づつみをうったり、富士見峠では、車中より薄化粧の富士と紅葉を観賞したりして、和気あいあいのうちに井川のキャンプ場についた。夜のパーティーは、支部長の司会で、日高元会長の挨拶にはじまり、地元滝浪さんの歓迎のことばなどあり、この日のために、特別に作られた、二合どっくりと地酒により、酒盛りに入っていった。

酒のさかなは、特産の椎茸に、なめこ、コンニャクなど山の幸と、ししの肉のかわりに、上等の牛肉で、皆、おもいおもいに悦に入り、時のたつのも忘れて楽しんだ。

翌朝は、昨夜の御酒がききすぎたのか雨となり、各コースに別れての山歩きもできず、松本さん一行は、真直に静岡へ、斉藤かつらさんの一行は、大日峠に、日高先生、小原さん御一家外二十名程の人々は、南画のように美しい雨に煙むる井川ダムを眼下に見ながら「南の黒部」といわれている接阻峡の紅葉をたのしみながら林道を歩くこと一時間と少々、閑蔵という駅についた。この小さい駅で、から松の紅葉をバックに、駅名の入いった看板を中心に記念撮影をとり、玩具のような電車の車中の人となった。

車中からの紅葉が、右に左にかわる美しさは、時の経つのを忘れさせた。ふっときがついた時は千頭であった。千頭で、普通車輌の電車にのりかえ、金谷の駅へと向かった。途中、沼倉さんを中心に川根茶談議に花を咲けたりして楽しい一時をすごした。金谷についた私達は、東に西へと別れて東海道の人となった。

（中保）

▽参加者　岩永信雄、綱倉志郎、山崎金次郎、松本熊次郎、鈴木英一、早川良太郎、日高信六郎、佐藤佳年、野口末延、沼倉寛二郎、達石八重、登坂信夫、長坂洋一、中保、斉藤桂、神田チヨ、沢田チヨ、小原勝郎、小原晴子、小原岳郎、小原由紀、菅原保夫、内藤正広、滝浪善一、石間信夫、青島秀夫川端信治、水野公男、鶴見敏彦、牧野衛、佐野敏郎、岩永安雄、山本朋三郎沢田礼子、市野弘、大村正、望月初男井川山岳会十名。

遭難対策シンポジューム

指導研究委員会と学生部共催で冬山遭難対策シンポジュームが十一月十四日午後六時半から日本体育協会四〇一号室で開かれ、約八十名の参加者があって盛会だった。

司会　金坂一郎

講演

△雪崩と天候▽　久米庸孝

雪崩と天候に関しては、雪の量と質が問題になります。特に雪の変質作用が問題です。

積雪の比重は、雪そのものの比重としては〇・九ですが、雪の結晶と結晶の間には空気がありますから、積雪そのものを一つの物体とみた場合は降雪直後で〇・一です。それが、時間がたつにつれて、雪の結晶の先の方は昇華してしまい、結晶はまるみを帯びて、また自重によって沈み、一日くらいで比重は〇・二にもなります。そのように変質した雪の上に新雪が降ると、比重の違う二つの雪面の間にはすべりやすい面が生じ雪崩は生じやすくなります。また降雪後の変質によっても、各各の雪層の変質速度の違いによっても雪崩は生じます。変質作用は、風・気温・日射等により促進されます。ですから降雪直後に雪崩が起きなかった場合でも、降雪後の風や、気温や日射の状態によっては危険になります。降雪直後の強風・快晴の日には用心が必要です。曇っていて、風が弱く、気温が低い時は比較的安全といえましょう。次に雪の量ですが、新雪雪崩は一晩に五〇㎝以上の雪があった時には起こりやすい状態になります。一晩に五〇㎝以上の降雪があるのはだいたい九～一〇日に一度、一m以上というのは一カ月に一回の割合です。積雪としては、本州では二月十日頃、北海道では二月末頃最高になります。

△雪崩と地形▽　五百沢智也

三八年一月、五万分の一地形国「大野」における雪崩発生地点の地形との関係

傾斜と雪崩　一、四〇度～五〇度
二、三〇度～四〇度
三、二〇度～三〇度

斜面の向き　東南方向が最多
西　最少

発生地点の斜面形組合せごとの発生頻度

凸形斜面（コンベックス）・凹形斜面（コンケーブ）　五一％
凹　・凹　二四
凸　・平行斜面　九
凸　・凸　七

植生と雪崩頻度

カヤ類　六二％
細い雑木　二五
幼い植林　二

雪崩と地形の関係を知るために、雪崩地図の必要性が説かれ、国土地理院でも、三八年一月の豪雪の際の裏日本一帯の雪崩分布図や、三八・九年の谷川岳のものなどを作成して来ましたが、このような図が日本全国の山について何年間にもわたって、作られるようになれば、冬山の雪崩に関する知識もふえ、危険予防にも役立つと思います。

△穂高稜線の雪▽　菅原省司

スライドを中心に、雪の結晶構造と気候との関係を発表されました。

低気圧通過の際の、温度、湿度が高い時に降る雪は針状結晶をしていて、アラレがまじっています。このアラレと針状結晶は一週間位そのままの状態で存在しますので、低気圧が去って気圧配置が西高東低になり、違った質の雪が降ると、雪崩やすくなります。

△緊急時における通信▽　芳野赳夫

日本山岳協会では、遭難者の発見を早めるために昨年の夏「沈黙時間」というものを規定しました。まだ余り守られていないようですが、遭難が起きたから連絡をとりたいと思う時、他で交信をされると、受信されにくいので、次の時間には、交信せず受信機を入れて聞くようにして下さい。

十一時～十一時十五分
十六時～十六時十五分
二十時～二十時十五分

（適用される周波数は二六・九七六メガヘルツ）

以上の時間には各地の救助隊も受信機を入れて聞いていますので、遭難者と救助隊との連絡が直接とれなかった場合に中継者が必要となりますので、遭難者からの発信を受け取った時は、遭難者の方で三回呼んでも誰も答えなかった場合に中継をとって下さい。中継者は、次の十項目について一項目ごとに確認をとりながら、中継するようにして下さい。

一、受信者、コールサイン、所属会名、オペレーター氏名
二、発信日時、場所
三、事故発生の位置、時刻
四、事故原因の程度
五、遭難者氏名、連絡先、遭難者状況
六、他のメンバーの状況
七、現場の状況（捜索が必要か、天候状態、雪の状態など）
八、救助要請の有無、希望人員、装備
九、今後の行動予定
十、今後の連絡方法

次に通信時に、尾根越しに通信する場合には、雑音が入って良く聞きとれなかった時は、直径十一mの円内を歩いてみるとか、高い所（二十mまで）に登るとか、近くに岩壁がある場合には、岩壁から二・五mくらい離れると、比較的良い場所が見付かることがあります。

△最近の学生登山▽　浜野吉生

昨年のシンポジウムでも同じような話をしたが、最近の学生登山は衰退しているのではないかという声をあちこちで耳にする。大学山岳部の魅力がなくなりつつあるのではないか。それは学生山岳部が目標を見失っているところに原因があるように思う。われわれは目標を「海外合宿」と「うまい山登り」に求めている。こうしたことを実践していくために、さらにはエベレストの頂に酸素ボンベの助けを借りないで登れるかという課題に立ち向かっていくためにも、体力の増強と判断力の養成がより一層図らなければならない。合理的なトレーニングの方法を採用し、それを強化するとともに、判断力の基礎となる正確な知識を増していくことが必要だろう。その一つとして、経験の継承が正しくなされるために、従来の登山記録とは別の、コンピューターにかけて分類、整理ができ、一つの原則を導き出すことができるような記録の型をつくっていくことができないか。そうした方法論の確立を学生山岳部の諸君に考えてもらいたいと思う。

海外登山技術研究会

日本山岳協会主催昭和四十四年度第八回海外登山技術研究会は十一月二十九、三十の両日八王子市下柚木の大学セミナー・ハウスで開かれた。ネパール・ヒマラヤの登山が三年ぶりで解禁されるなど、海外登山は再びブームを迎えようとするだけに、二日間充実した内容の討議が行なわれた。主な日程は次の通りであった。

▽十一月二十九日（十時半）

・松方三郎会長あいさつ

たくさんの諸君がすでに海外の遠征の経験を持っているので、あいさつをかね、遠征とは何かという私の考えをくどいようだが述べておきたい。エクスペジションを遠征といっているが登山とどう異うか。海外登山とは海外の山を登るということだけでなく、違う世界で、違うかたちで、違う質の山を登るということだ。これが重大な要素だと思う。今明日の研究会でさらに成果の多い内容の研究が行なわれることを期待する。

・研究会の趣旨説明（芳野赳夫）（要旨）

・パキスタンとネパールの最近の事情（牧内、佐藤外務事務官）

・八千m峰登山の諸問題（司会松田雄一）

▽十一月三十日

分科会（午前）

・気象（座長樋口明夫）

・装備（座長丹部節雄）

・食糧（座長平井一正）

・登山許可、八国（座長田中栄蔵）

・タクティクス（座長松田雄一）

・高度順化（座長古原和美）

右総括報告

・エベレスト第二次隊報告（宮下秀樹）

・本年度の若干の隊の報告

ネパール・トレッキング（野崎）

パキスタン（新貝）

アラスカ（氏家）

フェアウエザー（高坂）

午後三時半から五時まで食堂で懇親会を開き解散。

昭和四四年度年次晩餐会

昭和四十四年度年次晩餐会は十二月五日午後六時から平河町マッヤサロンで開かれた。四時すぎからサロンの一隅にバー開設、またことしは明年のエベレスト登山にちなみ、この一本展はエベレスト関係の図書資料を一堂に集め展示しなかなかの人気であった。

午後六時全員着席したところで三田会長から仲のよい昔ながらの山岳会にしたいとのあいさつがあり、乾杯後会長から在籍五十年の永年会員として石井鶴三、藤島敏男両氏の紹介があり銀バッジが贈られた。両氏のプロフィールについて石井氏は交野武一氏、藤島氏は匽根吉郎氏がそれぞれエピソードを交えて紹介した。

また第二次エベレスト偵察隊の宮下隊長から初公開されたスライドによる登攀の報告があり、感銘を与えた。

▽出席者　青木昇、青木一夫、安藤昌宣、安彦六郎、赤瀬暁、浅川栄一、荒巻広政、網蔵志朗、今井雄二、今井喜美子、今井嘉道、今西寿雄、石井鶴三、石田要久、石田吟松、石原憲治、岩永信雄、岩崎三郎、飯野亨、伊倉剛三、市川英脩、井上綱、入沢郁夫、五十嵐高志、宇田川久太郎、内田耕作、漆原知栄子、遠藤登、岡部紀正、岡部みち子、岡部太郎、岡野谷誠、岡村治信、岡本清一、小原佑一、小原晴子、小倉茂暉、小倉董子、大塚博美、大森薫雄、大橋晋、荻野和夫、荻野京一、織内信彦、折井健一、奥川雪江、長田義則、往古豊秀、小原勝郎、大野徳尹、神谷恭、神原達、神崎忠男、川上忠義、川崎精雄、川森左智子、勝田房治、笹原藤七、冠木伊右衛門、上村篤、金坂一郎、狩山芳夫、交野武一、河西邦彦、片桐理一郎、木下是雄、菊地文雄、木村勝久、桐野有函、工楽英司、国見利夫、近藤保人、近藤恒雄、近藤信行、小林義正、小林猛臣、小林智明、小山勝司、小西政継、河野幾雄、後藤幹次、小林雄次郎、小島甫、佐藤久一朗、佐藤勉、佐藤兼治、坂木矩祥、坂本幹、沢登均、沢村幸藤、桜井信雄、斉藤桂、酒井敏明、佐藤之敏、島田巽、進藤波男、城山正三、柴田均二、塩田仲雄、杉山孝、杉田博、須田紀子、関田美智子、関根吉郎、田辺主計、田辺多聞、田辺寿、田中正智、田口三郎助、田上敏行、高田真哉、竹田寛次、武田満子、瀬島清、滝紘之、田部井淳子、伊達篤郎、高橋進、茶谷東海、鶴岡元之助、鶴見敏彦、外山定男、外山義夫、富田英夫、富田美知子、鳥居亮、中屋健一、中田勇吉、中野征紀、中保、中川武、中島寛、中原繁之助、中西豊和、中司文夫、永原輝雄、長尾悌夫、名須川浩、長浜達也、中川広三郎、贄田統亜、新島義昭、錦織保清、西丸震哉、沼倉寛二郎、野口秋人、野上成勇、野口篤太郎、原田幹市、原謙一、浜野吉生、浜田一馬、初見一雄、春田俊郎、半沢稔、早川義郎、橋本清、平柳一郎、平沢亀一郎、平山武志、広羽清、日下田実、藤崎敏男、藤島亥、藤井運平、福田良深田久弥、船越好文、二木信次、細川雅弘、細川沙多子、堀田弥一、五月女進一、松本善二、松本義夫、松方三郎松田雄一、松村寿、牧野衛、牧野四子吉、牧野文子、槇有恒、牧野内昭武、松木滋、三田幸夫、三浦巌、三浦多美子、宮下秀樹、宮内勝男、宮崎英子、村山雅美、村尾金二、村関利夫、武藤晃、村石幸彦、森川洋佑、森宏子、望月達矢、諸岡一次、山口健児、山口節子、山本久子、山下一夫、山下久男、山崎安治、山形不二男、安川茂雄、山里寿雄、尹官炳、湯浅俊行、吉沢一郎、吉田久兵衛、吉阪隆正、芳野**赳**夫、芳野菊子、横田明男、横山厚夫、渡辺公平、渡辺兵力、渡部節子、鷲見竹由（二二三名）

ことしの「この一本展」

年次晩餐会にちなむことしの第八回「この一本展」はエベレスト関係図書展を行なった。エベレスト関係の図書は吉沢一郎氏の蔵書を中心に、神原達深田久弥、松田雄一、牧野文子、田中栄蔵の諸氏の出品をあおぎほぼ完ぺきなものを集めることができた。

これにJAC所蔵のものを加えたことはいうまでもないが、さらにエベレスト偵察から帰国した大森薫雄ドクターが一九六五年のインド隊の正式報告書である Kohli "Nine Atop Everest" を出品されるなど最近の資料もそろえられた。そのほかハント、エグラー、ディレンフアース、コーリの各エベレスト隊長からJACのエベレスト隊あてに寄せられたメッセージ、松方氏所蔵サマベールのエベレスト北面の油画など貴重な品々がずらりと展示された。エベレスト関係の文献リストとしてはまず世界的といってもよく、今回の出品目録・解題はまことに貴重なものといっても過言ではない。

なおこの出品目録はまだ若干残部があるので希望者はルームの図書室まで申し込めば五十円で入手出来る。

ルーム日誌（44年11月）

6日（木）定例理事評議員会
7日（金）海外連絡委員会
日本協会ネパール語講習会
10日（月）図書委員会
14日（金）日ネ協会ネパール語講習会
21日（金）日ネ協会ネパール語講習会
22日（土）学生部海外遠征報告会
24日（月）稲門山岳会総会
26日（水）第10回登山技術講習会机上講習会
27日（木）常務理事会
28日（金）日ネ協会ネパール語講習会

本会叙勲者（十一月三日）

十一月中来室者　六三四名

松方三郎（会員番号五四七）七十歳
勲一等瑞宝章
辻　荘一（会員番号四八七）七十三歳
勲四等旭日小綬章

退会者

二九三七　田中　恵（44・11）

物故者

五二七五　久世秀治　四四・八・八逝去

三二四二　梶本徳次郎　四四・一〇・二九逝去

一八七八　伊藤幸一　四四・一〇・三〇逝去

一三七五　加藤数功　四四・一一・二〇逝去

六二〇三　長井義昭　四四・一一・二〇逝去

第二次エ峰偵察隊歓迎会

第二次エベレスト偵察隊歓迎会が十二月二十二日午後六時半から白金八芳園で開かれた。宮下隊長からこまかな報告があり、スライドも新しいものが公開され、参会者に感銘を与えた。

あとがき　エベレスト本隊隊員もいよいよ決定、二月中旬には出発となった。会員各位の一層の御援助をお願いする次第である。

年次晩餐会におけるこの一本展の目録は、エベレスト関係文献目録で、まことに充実した内容である。残部がまだいくらかあるので希望者は図書室まで申し込んでいただきたい。（山崎）

昭和四十五年一月十日発行
東京都千代田区神田錦町三―二三　向井ビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　山崎安治
（293）七四四一
振替口座東京四八二九番
印刷所　東京都港区赤坂一丁目三番六号　株式会社　技報堂

ガストンの山岳書店
店主・L.C.ボーム（英国山岳会員）

登山、極地に関する各国の新刊、旧刊、絶版ものの取次ぎ販売。各国山岳会年報、月報、登山案内書、特殊地図、版画なども取扱っております。

型録その他のご照会、お申込みをお待ちしております。

宛名　"GASTON'S ALPINE BOOKS"
134 Kenton Road, Harrow Middlesex,
HA3. 8AL. England

（なお、JAC, AC, AAC, ACCの会員、Mr. Ichiro Yoshizawaは、私の親しい友人です。）

☆会報製本御引受け☆
製本代　（201号～250号）金600円也
送料　別受け　金120円也
中林製本手帳株式会社
東京店・文京区水道2～15，電話（943）0311（代表）
大阪店・都島区相生町7，電話（352）3491（代表）
名古屋店・昭和区雪見町1～15，電話（731）7331（代表）
工場：大阪工場（堺市），東京工場（戸田町）
▶背文字その他については往復はがきで日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!
●貯蓄にもなります。
●万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。
御相談は　日本団体生命　へ
角筈支部（専門取扱営業所）
東京都新宿区角筈1の844　新光ビル内
電話（352）1556・1557

茗溪堂の山の本

東京都千代田区神田駿河台２の１
電話東京291局9442／振替東京24723

山日記　1970年版

定価 530円

内容：

山の装備……池戸誠二郎
山の医療……景山　孝正
遭難対策……鹿野　勝彦
登山技術についての参考資料
世界の山々……吉沢　一郎
山の地名……佐藤　侊
山と人
　靴　靭……深田　久弥
　"山と人"論……渡辺　兵力
　私の山と山の絵…坂本　直行
　山路随想……田渕　行男
　山のテント・50年
　……片桐盛之助
　山の靴・スキーの靴
　……佐藤久一朗
　馬場島から入る山男と私
　……中村あき子
なだれ狩り……荘田　幹夫
インドの友……須田　紀子
山の宿……田口　二郎
山男と酒……白木　博次
現代登山と妄想…村木潤次郎
シェルパの話……浜野　吉生
生と死と……朝比奈菊雄
エベレスト
　エベレスト遠望…松方　三郎
　エベレストの頂上に立って
　……デルフ・ライスト
　わが人生におけるエベレスト
　……M.S.コーリ
　エベレスト8848メートル
　……藤田　佳宏
　エベレストのベースキャンプにて……宮下　秀樹
南　極
　ヒマラヤから南極まで
　……村山　雅美
　後　章……池戸誠二郎
　山のけもの，鳥，虫など
　……串田　孫一

山小屋一覧＊登山行程表＊地図図幅一覧＊日本の山＊日本の峠＊剣岳と谷川岳の登山規制条例＊夏山臨時電報電話取扱所一覧＊山岳保険について＊日本山岳会について＊日本山岳会支部一覧

初見一雄著　**すこし昔の話**　四六判 400頁 定価 1,200円

―千島・樺太・札幌・信濃―大正の終りから昭和の初めにかけての北アルプスは異色ある山男を生んだし，その山男たちのお互いの交りも，いかにも「よき時代」のものであったように思われる。初見君もその雰囲気を身につけた一人だが，さらに彼には，この著書に語られているような，北海道，樺太あたりでの特異な青春遍歴が加わっているわけだ。これらは生やさしい体験ではないだけに彼が語る気になってくれたことは，全くよかったとつくづく思うのである。

―島田巽・魅力ある話術より

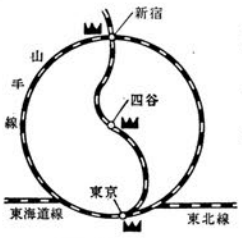
大島堅造著　**山の古典と共に**　B６判 280頁 定価 1,500円

大島さんはBook Collectingという，ホビーにいろいろある中でも，とくに好ましい"たのしみ"の持主で，一方晩年はいざ知らず，若い頃はあちこち山を歩かれたのだから，「山の本」が蒐書の対象になるのは，当然のなりゆきであったろう。或は海外勤務の時代に始まったものかどうか，その辺のところは私は詳らかにしないが，大島さんの西欧山岳文献のコレクションは，なかなかのものだと，関西はもちろん，関東でも本好きの山仲間は，ずいぶん古くからみんな知っていたのである。こんど旧稿新稿を集めて本を出されることになり，私はその内容目次を手にしたにすぎないが，英独仏の原典を丹念に渉猟して，しかもしっかりした原稿をかくという，不精者や怠け者には不可能なようなことが，長い歳月に亘って，続いてきたのを知ったのである。著者にとっては，そのときどきがたのしくて仕様がなかったのではあるまいか。ホビーとは，そういうものなのである。

―藤島敏男・余暇のみのりより

山の店、山の店、山の店、山の店、山の店、山の店
登山用具専門店
山の店
大阪市北区梅ケ枝町101　TEL. 362－5736
関西テレビ〈８チャンネル〉ウラ通南側

山とスキーの専門店
片桐
東京都文京区湯島３丁目38－９
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店　東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店　東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店　新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社 **たかはし**

登山とスキー具
プライス
リスト進呈
イワタ
東京都中央区日本橋通２－１
PHON; 271－7686・1718

登山用具の専門店
好日山荘
カタログ進呈
東京店・中央区銀座西２－５　(561) 0966・3600
東京店・千代田区有楽町0チャームユーナー　(567)9031
大阪店・北区老松町３－12　(364) 0933～4
神戸店・生田区北長狭通3-8-19　(39) 4126
神戸店・生田区三ノ宮町1－32－1　(33) 5251
福岡店・須崎町１－４　(28) 3440